

東京農業大学農大本校

学校だより【7月12日】第16号



行ってきました 第一回伊豆宿泊学習（1組）

1年1組の子どもたちとその保護者の皆様が参加して、7月6日(土)、7日(日)に伊豆宿泊学習が実施されました。1年生ですが、1泊2日です。保護者の皆様も同行しましたが、バスも宿泊する部屋も別です。親子で行動するのではなく、子どもたちと教員と一緒に学習の様子を周りから見る、という形式をとりました。保護者の皆様は、自分の子どもに声をかけたいところを、ぐっと我慢。子どもたちがどのように友だちと接するのか、先生のお話をちゃんと聞いているのか、一人で食事ができるのか……を見ていただく機会としました。

子どもたちは、ご家族がそばにいるという安心感もあったのでしょうか。1年生ながらもしっかりと行動し、食事、入浴、就寝などをこなしていました。保護者の皆様には、自分の子どもの様子を見るだけでなく、保護者どうしが親しくなるよい機会になったようです。

本校の教育理念は「冒険心の育成」です。伊豆宿泊学習は、子どもたちにとっても、保護者の皆様にとっても、「はじめての経験＝冒険」が多くあったことでしょう。難しそうなことも、やってみればできるもの。そして、その達成感も大きいものです。宿泊学習を終え、1組の子どもたちが大きく成長したのを、教職員は実感しています。子どもたち自身も、また、保護者の皆様も同感ではないでしょうか。今週末は、2組が伊豆宿泊学習に出発です。2組の子どもたちや保護者の皆様にも、たくさんの冒険をしていただきましょう。

なぜ伊豆に？

伊豆宿泊学習では、[伊豆シャボテン動物公園](#)と[熱川バナナワ二園](#)を訪問し、宿泊は[桜美林学園伊豆高原クラブ](#)を利用させていただきました。

訪問先で見る植物や動物について、子どもたちは十分に事前学習を重ねてきました。また、訪問先で質問したいことなども、考えて行きました。伊豆宿泊学習でも、子どもたちはすべてに興味津々、楽しいだけではない深い学びができた様子です。あいにくの悪天候もものともせず、と頼もしいところも見せてくれました。

保護者の皆様には、往復のバスの中や初日の夕食後の時間を利用して、校長や教頭によるミニレクチャーを聴いていただきました。なぜ、伊豆シャボテン動物公園や熱川バナナワ二園に行くのか、そこにもわけがあります。これらは、東京農業大学の元教授 近藤典生博士が指導して作られた多数の施設の一つであり、また、本校の関係者が多く勤務している施設でもあります。単なる動物園・植物園ではありません。校長からは、近藤博士の世界観に基づく設計の思想について、保護者の皆

様に説明させていただきました。さらに、教頭からは、子どもたちの学校での様子を保護者の皆様にお伝えしました。子どもたちの学校での楽しい失敗談や、うれしい出来事、かわいい発言……、保護者の皆様にも楽しんでいただけたかと思います。

桃をいただきました！

山梨県の西側、南アルプス山麓に位置する[南アルプス市](#)、素敵な名前ですね。南アルプス市は山梨県の西側にあり、美しい南アルプスの山々や自然に囲まれています。南アルプスとは、富士山に次いで日本で2番目に高い北岳とそこに連なる3,000mを超える山々のことです。市の名前に外来語（アルプス）を使用したのは、南アルプス市が日本で最初だそうです。さらに、桃の収穫量日本一の山梨県の中で、南アルプス市内でも桃の生産が盛んです。春には一面の桃の花の中で、桃源郷マラソンも開催されます。さぞ、きれいでしょうね。

この南アルプス市で副市長を務めておられる東京農大の卒業生 手塚千広 様より、「大好きな桃の味わい、その一口の潤いが、お子さんたちの”元気な笑顔”につながってくれたら幸いです」とのメッセージとともに、本校の子どもたち一人一個ずつ、見事な桃のプレゼントをいただきました7月9日、子どもたちは全員、ランドセルに入れた桃もお持ち帰りです。桃の香りってどんなかな？ ジューシーな桃の甘い味を家族とともに楽しんだことでしょう。

南アルプスは日本の[ユネスコエコパーク](#)にも登録されています。ご家族の皆様も、これを機会に山登り、フルーツ狩り、温泉と様々な楽しみのある南アルプス市に興味を持っていただき、いつかは訪ねていただけたらと思います。



マンゴーの香り 教室いっぱい

7月9日、大学から国際農業開発学科の志和地教授が本校にいらっしゃいました。志和地教授は熱帯の作物の専門家です。実はこの日、東京農大の卒業生沖縄県石垣島の石垣 様([石垣トロピカルファーム](#))、そして、沖縄県宮古島の加部様([ミナバ果樹園](#))から、本校の子どもたちへと、マンゴーのプレゼントがありました。そこで、志和地教授から、マンゴーはどこで最初にできたか知っている？（答えはインド）マンゴーはうるしの仲間をかぶれることがあるよ、軸のあったおへそのようなところが一番かぶれやすいよ、などのミニ講義をしていただいたのです。そして、沖縄の美しい海やマンゴーを栽培している画像もを見せていただきました。

東京農大を卒業して、全国各地で、また、世界で活躍する方々がたくさんおられます。本校の子どもたちは、一番若い東京農大ファミリーのメンバーとして、たくさんの先輩たちが見守り、応援してくださっているのを改めて感じました。

本校の子どもたちは、マンゴーもタオルなどに大切に包んで、ランドセルに入れ、お持ち帰りをしました。家族で、マンゴーの話に花が咲いたことでしょう。沖縄県の様々な熱帯果樹や野菜、きれいな海、さらに、歴史や守られてきた伝統文化などの魅力を、子どもたちにも知ってもらいたいと願っています。保護者の皆様にも、子どもたちの興味の芽を、食卓からさらに伸ばしていただきたいと思いますようお願いします。

大きい！ スイカをいただきました

東京農大と包括連携協定を結んでいる茨城県阿見町。霞ヶ浦に面し、豊かな水資源にも恵まれ、新鮮な農産物の産地として知られています。阿見町のスイカは、糖度がなんと12度以上という抜群の甘さです。

このおいしいスイカを、[阿見町](#)(町長 千葉 繁 様)から本校の子どもたちに贈呈していただきました。農家の吉田さんファミリーが栽培された大玉スイカで、品種は紅大といえます。東京農大国際食農科学科の学生たちが、3月のファームステイで定植したものだそうで、町長千葉様と東京農大高野学長との間でお話がまとまり、担当者の阿見町 浅野様をはじめとした方々により本校に届けていただきました。

7月11日(木)、子どもたちはまず、一つ6kgはある大きなスイカを抱きかかえて、その重さを感じました。そして給食後、教頭先生が切り分けたものを、一人一切れ、二切れと味わいました。三切れ食べた子どももいます。その甘さに、子どもたちも、また、教職員も歓声をあげていました。ツルは元気な4本のみを選別、ミツバチで交配、一つ一つを丁寧に玉返し、と丹精込めたスイカです。阿見町ってどんなところかな？ こんなに大きなスイカはどうやって作ったのかしら、と子どもたちの味覚だけでなく、好奇心をも刺激するプレゼントとなりました。阿見町の皆様にも、子どもたちの「ごちそうさま」が届いたでしょうか。



校長 夏秋 啓子